

## 日本の秋は実りの秋で食文化をゆっくりと楽しむことについて

### 1 「〇〇の秋」と言われる良い季節

徐々に秋らしくなってきました。

日本で「秋」というと様々な修飾語が付きます。春夏秋冬、日本には四季がありそれぞれに、日本人には様々な思い入れがあります。しかし、だいたいの場合、春・夏・冬の季節につく言葉は、寒暖や気候のことか、あるいは農業に関する事、そして花や動物に関する内容がほとんどです。しかし、秋だけは「人間の趣味」に関する修飾語がつくことが非常に多いのです。

例えば「芸術の秋」「スポーツの秋」「読書の秋」というような感じで、私たちが、何をするか、あるいは何をしたかということが中心になった修飾語がつくことが非常に多いのです。

これは、日本が農業国であり、秋になれば収穫に時期になります。収穫が過ぎれば、だいたい一年の仕事は終わりになります。来年に向けた仕事はいくつかありますが、それでも雪に閉ざされる季節を考えれば、春や夏などとは仕事の量は少なくなります。

そのうえ、秋は「中秋の名月」といわれるくらい月も明るく、また、夜も徐々に長くなります。また暑すぎもせず寒すぎもしないという非常に良い気候になるために、秋には、やっと「自分の好きなことを行う時間が作れる」ということになるのではないのでしょうか。

その農業の話ではなく、今回は少し「〇〇の秋」について考えてみましょう。

まず簡単なのは「読書の秋」でしょうか。読書の秋という感覚は、本が一般に普及してからの単語です。読書週間が秋に実施されるため、「読書の秋」が定着したのではないかとも言われています。日本において「読書週間」は大正 13 年 11 月に始まった「図書館週間」がその前身になります。

では大正 13 年になぜ図書館週間をこの季節にしたのでしょうか。それは、中国の唐時代の詩人韓愈の漢詩に「燈火稍く親しむ可く」という一節があり、ここから秋が読書にふさわしい季節として、「秋燈」や「燈火親しむ」といった表現が使われるようになったのです。「本を読む」「勉強をする」ということで、「苦勞して勉強をする」という意味では唱歌「螢の光」の歌詞が有名です。「螢の光、窓の雪、書読む月日、重ねつゝ、何時しか年も、すぎの戸を、開けてぞ今朝は、別れ行く。」原曲はスコットランド民謡「オールド・ラング・サイン」とされていますし、今ではお店の閉店の音楽として有名になっていますから、

皆さんも一度は聞いたことがあるのではないのでしょうか。この歌詞の内容は「螢雪の功」と言います。これは、昔の中国の「晋」という国のお話です。「晋」の国にいた「車胤」という人は、大変優秀でしたし向学心も旺盛でしたが、貧しくて明かりのための油も買えなかったのです。そこで、知恵を絞って、螢を集めその光で勉学に励んだそうです。また同じ国に住む孫康という人も、貧しくて同じように夜の明かりを取ることができなかった。勉強したくても夜が暗く手本が読めません。そこで、雪の明かりを使って、その雪に反射する月明かりで勉学に励んだそうです。後にその二人は大成したといわれています。この二人の話は、「螢」「雪」が出てきます。要するに「夏」と「冬」の厳しい季節に苦学をし、その努力が実って成功したということなのです。

逆に言えば、夏と冬はいまひとつ読書や勉強には向いていない季節。それに比べて秋は、夜も長く、月も明るく、気候もよく、勉強や読書には最適と言うことではないのでしょうか。そのようなことを加味して、また螢雪の功のような中国の故事を参考にして、「図書館週間」が制定され、現在に「読書の秋」「勉強の秋」と言うような形で言われるようになったのです。昔の人にとっては、農作業などに追われることなく、一年の仕事が一つの節目になり、また、気候も良く、秋の夜長にゆっくりと好きな本を読むというのが、最も贅沢な時間だったのかもしれないですね。

## 2 「芸術の秋」という庶民の最も美しい季節である「秋」

「芸術の秋」も、読書の秋と同じで近現代になってからの言葉になります。

古代から近代までの期間、庶民が芸術を好むと言う風潮は少なかったのではないのでしょうか。それは、ひとつには、芸術が宗教や権力と強く結びついていたということ、そしてもうひとつは日本の場合は芸術が文字文化の中で発展してきたことによるものではないのでしょうか。

日本の芸術品といえば、代表的なものは「仏像」や「仏教美術」に代表されます。色鮮やかなものや輝くものは、いずれも「神の世界」のものであるとされ、人間の世界は、それらを羨望するような状態になっています。光が神の世界に通じると言うのは、まさに「西方浄土」と言う考え方になって表現されます。これは、たとえば海に太陽が降りるときに、海水面上に太陽の光が反射して帯のようになって陸に近づきます。この光の帯を「光の道」と称し、太陽に象徴される神の世界につながる道であると考えたのです。そもそも太陽そのものが天照大御神であり、その光の先には神々の世界がある。そこにつながる道は、普段は見えないけれど、光の道として特別なときに見えると考えられていたのです。当然に、光の道は、朝ではなく夕方に見ることが多い。そのために太陽が沈む方向、西に「神に世界である浄土」があると考えたのです。

そして神の世界が光り輝いていると言う思想は、平安時代に確立され、その思想が日本中に広がります。東北三代で有名な藤原清衡は、自らの思い描く「光り輝く浄土」をこの

世に生前のうちに作ろうと考え、ひとつの建物を建立します。それが世界遺産になった平泉の中尊寺金色堂です。屋根やかからまで全てを金と光で表現した「極楽」は、その中に多くの仏像が安置され、そしてその下には藤原清衡をはじめとする人々が安置されているのです。彼らの、極楽に対する考え方と、それを求める精神が良くわかる内容ではないでしょうか。

さて、このように芸術は仏教や権力と結びつくようになって発展します。どちらかと言うと、庶民が芸術を行うのではなく、宗教関係者がまだ見ぬ極楽や仏像を具現化するというプロセスの中で、芸術が発展してきたものであり、それはキリスト教などでも同じ発展の過程をしていますね。それが、徐々に日用品などに反されます。宗教儀式に使っていた「人形」が、いつの間にか女の子の遊び道具になり、初めは薬であったお茶が、庶民に振舞われる飲み物になり、その道具が宗教や儀式から切り離されて庶民の中の芸術になるのです。

このように考えると、芸術は、もともとは、日本の場合「季節」と関係がないかのようには思われます。この「芸術」が、まさに「芸術」として成立し庶民の中で一本立ちするのは、明治時代以降の話になります。明治時代以降、芸術が芸術として受け取られるようになり、その庶民が芸術に親しむようになります。特に絵画、または俳句や和歌などは、芸術として高く評価されるようになり、海外からの人々が珍重するようになるのです。その中で芸術品がもっとも作られるのが、「秋」なのです。

日本の「秋」は、色がすべて「赤か黄色」になります。もちろん紅葉のことです。稲も実って黄金になり、それがそのまま存在するだけで日本の美しさを表現する最高の舞台になるのですが、それらの鮮やかさを残す、と言う意味で、芸術家が最も芸術のイメージーションが沸く季節が、当時「秋」であったとされているのです。

また、稲作の影響で、日本全国で芳情の祭りが行われます。現在でこそ、夏休みにあわせた祭りなどで観光客がにぎわうことが少なくありませんが、新嘗祭を含め、五穀豊穡と来年の豊作大漁を祈願する祭りは収穫の季節に行われ、その祭りには、地域の色を示したさまざまな山車や神輿、または巫女の舞や神楽が出されるのです。それらもすべて「秋」のお祭りであり、先祖が帰ってくる「お盆」の儀式と別に行われるのが風習になっています。

これらの祭りが、最も庶民における「芸術」の場所なのかもしれません。このように考えると「芸術の秋」は、まさに日本の秋祭りや、宗教から切り離され、庶民の中で根付いた日常の中の「美しさ」を表現する、最も良い季節が「秋」とされたということではないでしょうか。

### 3 「スポーツの秋」と「食欲の秋」

さて、あと代表的な「〇〇の秋」は「スポーツの秋」でしょうか。

やはりこれも近現代日本の象徴であるかのような内容になってしまっていますが、日本人に古来「スポーツ」という概念はありません。スポーツそのものよりもそもそも田畑の作業が「運動」ですから、本来は、スポーツなどしなくても十分に健康でいられるようになります。特に、田畑の作業は、朝早くから行うのが常ですので「早寝早起き」で「体を動かす」ということになり、なおかつ「無農薬の最もおいしい旬の食材」を口にするのですから、健康でないはずがありません。

しかし、昭和になり高度経済成長になってから、会社などの労働が行われるようになりました。地面はアスファルトで覆われ、真夏に運動すると熱中症でかえって健康を害するような状態になります。そこで、適度に体を動かし健康に気をつけるということになれば、当然に、気候の良い「秋」に行うということになります。春も気候がよいのですが、皆さんも春は新入社員がいてまたは入学や卒業があり、何かと忙しく忙殺されてしまい、夏を過ぎて落ち着く「秋」が最適とされています。

また、そのきっかけとなったのが東京オリンピックです。東京オリンピックはさまざまな都合により、他の国と違って秋に行われました。現在は「第二日曜日」となっている「体育の日」ももともとは、10月10日で、これは東京オリンピック開会式の日であったために、この日が「体育の日」となっているのです。

体育の日、スポーツの秋でもわかるように、日本人はとかく健康等にも敏感になります。そこで、「〇〇の秋」の中で、最も古くから存在する代表的なものがあります。「食欲の秋」「味覚の秋」と言われるものがそれです。

9月にはいると秋の食材がさまざまに出てきます。一般に「果物の夏・食物の秋」といって「食欲の秋」とはよく言ったもので、この季節は、私のようにダイエットをしている人にとってはもっとも良くない季節であり、何とも悩ましい季節なのです。実際に痩せなければならない人が秋になると、我慢するのが大変になるというのは、経験のある方も少なくないのではないのでしょうか。

基本的に、「秋」は真夏の暑さであまり食欲がなく、夏ばてをしてしまっていた身体が、徐々に温度が落ち着いてきて、食欲が回復してくる季節であり、その上で、「実りの秋」でおいしい食材が手軽に入る季節になるので、より一層「食欲が増す」という意味合いがあります。また、この季節の食材は、多くのものが旬を迎えるものばかりで、非常においしいものばかりです。稲作文化の日本の場合は当然にコメがこの時期に「新米」を得ることができます。しかし、それだけではありません。そこで、秋の季語となっている食材は代表的なものだけでも110もの種類があるのです。この時期は、穀物、イモ類がすべて収穫の時期ですし、きのこ類もほとんどがこの時期になります。

#### 4 秋の食材の王様「マツタケ」「柿」を文学の世界で表現する

特に秋の食材の王様といえば「マツタケ」ですが、この松茸は、日本人がめでたい植物

として考えている松から生えてくる「茸」ですから、その香りだけでなく、その由来や生育なども含めて、非常に珍重されています。

この秋の食材に関しては、日本の文学でも様々にうたわれています。

そもそも松茸は日本でも古くから食べられており、その香りはもっとも高貴なもののひとつとして珍重されていました。その様子は万葉集にも「高松の この峰も狭(せ)に 笠立てて 満ち盛(さか)りたる 秋の香のよさ」巻10の2233 作者不詳(高円山の峰も狭しとばかりに、まあ見事に茸の傘が立ったことよ。眺めもさることながらこの香りの良さ。早く食べたいものだなあ)とうたわれていたほどで、日本人は松茸を見るとその香りで「食べたい」と思うものなのです。

「実りの秋」といえば、何も主食ばかりではありません。秋の果物で代表的なものが「柿」です。有名な「柿食えば 鐘がなるなり 法隆寺」も秋の俳句で有名なものではないでしょうか。この俳句は、明治の俳諧正岡子規の代表的な俳句で、皆さんも一回は聞いたことがあるのではないのでしょうか。正岡子規は、東京で記者をしているときに吐血し、結核にかかってしまう。故郷松山で療養をするのであるが、少しして病状が良くなったために帰京する。その旅の途中、奈良に立ち寄った時に生まれた俳句です。子規が随筆「くだもの」を執筆中、漢詩にも和歌にも奈良と柿とを配合した作品がないということに気付き、その新しい配合を使った俳句に喜んだといわれています。

柿と入っているだけで、秋の話、そして鐘がなるという単語で夕方の寺の鐘の音であろうということが想像がつくではないですか。たった17文字、世界で最も短い「歌」で季節と情景が浮かんでくるのは、日本人特有の感覚ではないのでしょうか。そして、日本人はこの「柿の味」が口に中に浮かび、そして鐘の音が聞こえてくるような感覚になるのです。この感覚の共有こそが、日本人の証明なのかもしれませんね。なお、蛇足ですが、1916年9月、法隆寺境内に子規の筆跡によるこの句の句碑が建てられています。また、2005年、全国果樹研究連合会は10月26日を子規がこの句を詠んだ日として「柿の日」と制定しています。この俳句の与えた影響は非常に大きなものですね。

## 5 「秋」の季語にある代表魚「秋刀魚」と「鯛」をめぐる古今の話

秋の味覚とは植物ばかりではありません。秋鮭・戻鯉などは、本来秋の食材で、その秋鮭の中で最高急なものが「鮭児」といって珍重されています。多くの魚は、日本の周りに二つの季節で回遊してきます。それは季節によって回遊するパターンと鮭などのように産卵のために日本の河川に戻ってくるパターンの二つです。このために、秋にとれる魚は「秋鮭」「秋鯖」など、わざわざ通常のものとは区別するために「秋」という単語をつけたり、あるいは、普通のものとは違うという意味で「落鮎」「落鰻」など、一般と違うという意味で「落」、要するに季節から外れているという単語を使うパターンがあります。いずれも「秋」「落」という漢字がついている方がおいしいとされています。

江戸時代には、旬よりも「走り」を食べることが、日本人の価値として最も貴重なものということがあげられましたが、実際においしいのは秋の魚といわれています。特に鮭など産卵のために来る魚は、卵を持ってそれを生むために力を蓄えていますから、非常に脂がのっていておいしいといわれています。

しかし、それとは別に「秋」という字が入っているさかながあります。一つは「鰯」これで（かじか）と読みます。「杜父魚」と書いたほうがなじみがあるかもしれません。もう一つは「秋刀魚」ようするに「サンマ」です。

秋刀魚が文学で表現されるので最も有名なのは「目黒のさんま」ではないでしょうか。

目黒のさんまのあらすじは

殿様が目黒まで遠乗りに出た際に、供が弁当を忘れてしまいました。殿様一同腹をすかせているところに嗅いだことのない旨そうな匂いが漂ってきました。殿様が何の匂いかを聞くと、供は「この匂いは下衆庶民の食べる下衆魚、さんまというものを焼く匂いです。決して殿のお口に合う物ではございません」と言います。殿様は「こんなときにそんなことを言われるか」と言い、供にさんまを持ってこさせました。殿様は、食べてみると非常に美味しく、殿様はさんまという魚の存在を初めて知り、かつ大好きになったのです。

それからというもの、殿様はさんまを食べたいと思うようになります。ある日、殿様が食べたいものを聞かれると、殿様は「余はさんまを所望する」と言います。しかし庶民の魚であるさんまなどお城にはありません。あわてて部下は日本橋にさんまを買いにゆきます。

お城での料理は殿様の健康を気遣います。さんまを焼くと脂が多く出ますが、それでは体に悪いということで脂をすっかり抜き、骨がのどに刺さるといけないと骨を一本一本抜いて魚の形もなくなってしまいます。こんな形では出せないの、練り物にしておわんに入れて出します。これはかえって不味くなってしまったかんじです。殿様はそのさんまがまずいので、「いずれで求めたさんまだ？」と聞くと、部下は「はい、日本橋魚河岸で求めてまいりました」。そこですかさず殿様は「ううむ。それはいかん。さんまは目黒に限る」。

これは、殿様があまりにも世間知らずで一般庶民の生活を知らないということと、その殿様を過保護にしている部下たちを笑いのネタに変えたものです。殿様の無知は、殿様が、海と無縁な場所（目黒）でとれた魚の方が美味いと信じ込んでそのように断言する、というくだりが落ちであり、それを笑いにしているのが日本人の庶民のパワーですね。ある意味で、殿様が絶対的ではないし、庶民が必ずしも殿様に従っているだけではない日本の支配状態が良くわかる落語になっています。

しかし、この落語で明らかになるのはそのような殿様と庶民の主従関係ではありません。実際に、この物語で最も重要なのは「秋の秋刀魚はおいしい」ということです。秋刀魚が月並みな、そしてお城で出る食事と同じ程度の味ならば、この落語は成立しないのです。そして、その秋刀魚のおいしさを庶民がみんな知っているということです。誰でも知って

いる非常においしい食材を、殿様は何も知らないということ、そしてそれを出す殿様の部下たちが、ものの見事に秋刀魚のおいしさを取り除いてしまうこと。そのおいしい部分、例えば秋刀魚の脂など、それも庶民が最もよくわかっているということではないでしょうか。秋刀魚そのものの魅力を庶民が知り尽くしている。その前提がなければこの話が成立しないのです。これが「松坂牛のA5ランク」では、おいしいのはわかりますが、庶民皆がその感覚を身近に共有できないということになります。

この落語を聞いて「殿様の無知」を笑う人はいても「秋刀魚がまずいはずだ」というような人はいないのです。日本人の味覚に秋の「秋刀魚」は庶民の食卓には欠かせない品になっているのではないのでしょうか。そして、殿様の教育も、庶民と殿様の身分の差も、すべてのしがらみや世の中の仕組みが、実は「秋刀魚のおいしさ」という「味覚」ですべて消し飛んでしまうということなのです。それほど日本の秋の味覚はおいしいと言えるのではないのでしょうか。

同じような話が平安時代にも残されています。

「源氏物語」で有名な紫式部が、鯛が好きで鯛を食べました。しかし、鯛は感じて「魚へんに弱い」と書き、なおかつ音が「賤しい」に通じるということで、貴族の間ではあまり食されなかった縁起の悪い魚であるとされました。鯛も油の多い魚ですから料理をするにおいが残ります。夫の藤原宣孝はすぐに妻が鯛を食べたことをわかってしまいました。紫式部は夫から「そんな下品な下魚を食べていると身分に恥じますぞ」と言われました。そうすると式部は和歌でやり返しました。「日の本に はやらせ給ふ 石清水 まいらぬ人はあらじとぞ思ふ」（日本人なら石清水八幡宮に参らない人がいないように、鯛を食べない人はありますまい）。「いわし」と「いわしみず」をかけた文学が得意な紫式部らしい和歌の反撃に、夫の藤原宣孝はそれ以上何も言わずに引き下がったと言います。

「鯛」は、実は秋の季語に入ります。そして、鯛は庶民の魚の代表格ですが、これは、実は平安時代からずっとそうなのです。そして当時の貴族は、一つには海のある場所から京都まで、非常に遠く新鮮さを保ちながら魚を運ぶ技術もなかったことからなかなか新鮮な魚を食べなかったということがあげられ、脂分の多い魚は、京都ではあまり食せなかったという事情があります。そのために、鯛や秋刀魚などは当然に、京都では食べられるものではなかったのです。逆に海で肉体労働を行う庶民の食べ物として油の多い魚は認識されていました。当然に、魚でも大きな魚が格が上とされていたので、鯛のように小さく、そして普段は食べることもない魚は、貴族の間では賤しいとされていたのではないのでしょうか。

しかし、それだけに食べるとその味はまた格別です。紫式部が夫婦げんかをしてまでも「鯛」を食べたかったというのが良くわかりますね。この話も、鯛という「秋の味覚」が貴族や賤しいという不名誉な評判などを吹き飛ばし、そして、おいしいものを食べたいという日本人の感覚が勝った例として挙げられるのではないのでしょうか。

## 6 日本人と食の文化

日本人は、このように非常に食文化に恵まれていますし、その食文化が優先して、身分や評判を覆してしまいます。これは、日本人特有の宗教観、要するに「魚や植物にも命と神が宿っている」というアニミズム的な感覚が非常に大きいのではないのでしょうか。日本人の人間の間にある決まり事よりも、食材の命や神との関係の方を重視するということが一つの感覚になっていたと考えられますし、また、そのようなことを言って、おいしいものを追求する日本の食文化に大きく影響されているのかもしれない。

そもそも日本の文化は中国などから伝来したものが非常に多くあります。その中でも食文化は非常に多く中国などから伝来していますが、日本の古来の日本食の中にそれらを取り入れて新たなものを生み出すようにしています。その日本の文化が、最もよく表れているのが日本の食文化なのかもしれません。

そして、そのように様々な形を変えることのできる食文化は、日本の恵まれた国土、そしてきれいな水、そして豊富な食材によってもたらされているということが出来るのかもしれない。この日本を食材が豊富という意味も含めて「豊葦原」と、あえて「豊」という漢字を付けて名付けた古代の人々の感覚が良くわかるのではないのでしょうか。

さて、食欲の秋、味覚の秋です。日本人はやはりこの「秋」を「食べる」ことを楽しまなければならないのではないのでしょうか。皆さんも改めて、「秋」を目と頭と、そして舌で楽しんではいかがでしょうか。